

---

# とある王国に巡る運命(もの)

雨音 流歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある王国に巡る運命もの

### 【Nコード】

N7591X

### 【作者名】

雨音 流歌

### 【あらすじ】

かつて在ったという戦乱が嘘のように安穩そのものの国、虹霞にじげん。国を統べる王族を筆頭に、討魔士たごし・呪術師まじ・龍使りゆうしか・調薬師てうやくし・万獣使ばんじゅうしかいなど数多の才知に長ける人々がそれぞれ集団を作って生活しているこの国で、もうじき今年度の全部族交流会が催される。

それは、歴史の循環サイクルが巡り戻ってきた日でもあった。

「さあ、始めましょうか」



## 01 討魔士、夕紀

「いつまで隠れてるつもりかな。私、早く帰って寝たいんだから手を煩わせないでくれない？」

それだけ言うと、少女は自分の半身くらいの長さはありそうな刀を床板に突き入れた。

「あ、あの…」

「おじさん、心配しないで。この床板って結構頑丈みだいだから、ちよつとやそつとじゃ家崩れたりしないよ。」

この家の家主である中年の男性にやや的外れなフォローを入れる少女。普通ならここで「このクソガキが。人の家に傷付けといてふざけたこと抜かすんじゃないか」とか言われかねないが、運良く男性は穏和な性質らしく、「寝室は破壊しないでおくれよ」と言った他は若干固い笑顔で黙って状況を見守ってくれている。とりあえず親父からの鉄拳（手刀だったり刀の鞘だったり、バリエーション豊富）は回避が決定したらしい。本当に良かった。あれは本当に痛くて、そのうち頭の形が変わってしまうんじゃないか…と割と本気で考えたりしてしまうほどだ。安堵のため息に併せて突き入れた刀に両手を添え、力を込めると同時に横方向に掻っ切る。

数秒間の不気味な間の後、真っ黒い大型の魃いたちみたいな妖魔が軒下からヌツと顔を出した。

「よし、来たな」

紅い瞳でジツと視線を向けてくるそれに挑発的な笑みを返し、

「よ…っ」

華麗な空中回転で外へ躍り出、ポケットから笛を取り出す。妖魔の

気を引き、この家から離そうという作戦だ。程無くして高い音で笛が唄い始める。と、予想通りすぐに妖魔がこちらを向いた。

「おーい、こっちだよー」わざとらしい声で呼び、少女は家の裏手にある森林に向けて悠々と歩き出す。すると妖魔は低く唸り声を漏らし  
追い風でも受けたかのような物凄いスピードで向かってきた。しかし、少女がそれしきの事で動じることはない。

「そうそう、全力で来てくれなきゃ面白くないよ」

『達観』という言葉がよく合う、少しの乱れもない口調と表情、揺るがない眼光で前を見据えたまま呟く。少しして少女は歩みを止め視線を上げた。それは注連縄しめなわを張った一本の大木。

「……………他者ひとに手助けして貰うのは好きじゃないけど、仕方ないか  
…」

ため息と同時に腰のベルトに引っ掛けていた鞘から、今度は小刀を抜き取る。これは斬撃ざんげに用いるのではなく、妖魔の浄化用に打たせた、特別な刀だ。

「退治屋、夕紀ゆきの名の元に命ず。神宿る樹いっまき、その体ていに秘める浄めきよの御力みちから、我が内うちに貸し添えよ。」

少女 夕紀はつきりとした口調で呪詞まじことを唱え、小刀をかざした。

すると、白い刀身が紅と朱色を混ぜたような色の光に包まれた。網膜に鮮明に訴えてくる光に目を細める。しばらくすると光は細くなってゆき、やがて完全に消えた。…そして、それと同時に妖魔の爪つめが空くうを引っ掻く音が。

「うおっと…!!」

瞬時に左腕で受ける。そして間髪入れず峰打ちを食らわした。妖魔が怯んだ隙に体制を立て直し、腕の具合を確認する。鋭い衝撃で袖

口から腕にかけてが破れてしまったが、とりあえずは掠り傷程度で済んだようだ。

「…さて、それじゃ最後いきますか」

言うや否や夕紀は先ほどの小刀を取り出し、振り上げて「今すぐ君を解放してあげるからね。」

迷い無く振り下ろし、妖魔 甬の中に潜んでいた妖魔を討った。

「お、夕紀早かったじゃん。お疲れさん」

村に戻ってきた夕紀に、不意に声が掛けられた。少し視線を上げると、半袖シャツを肩まで捲り上げ黒髪短髪をタオルで掻き回している、比較的端正な顔立ちの男子が夕紀の右手にある家の窓から少し身を乗り出すような格好で笑っていた。彼は幼馴染みだ。大方、ついさっきまで剣術の訓練でもしていたのだろう。

「うん。そっちもお疲れ様、暁。…シャワー浴びたらちゃんと髪乾かしなよ。風邪引くよ?」

まるで母親みたいなことを言う夕紀。対する暁は、「平気だよ。…つくしよいつ」

平気と言った傍からくしゃみをしていては説得力の欠片もない。思わず爆笑しそうになって慌てて口を紡ぐが、声が少し漏れてしまった。

「…つたく、笑ってんなよな。…あ、そうだ。さつき夕紀のお父さんが夕紀に話あるとか言ってたよ。行った方が良いんじゃない?」

「…は?今日はまだ何も悪さしてないんだけど」

夕紀の口調に僅かに刺々しさが生まれる。

「『今日は』って…いつも悪さしてるのかよ。まあお前ならやりそ  
うだけど」

「……ナンダッテ？」

ジロリと暁を見上げる。暁は透かさず「悪い、失言だった」と言っ  
たが、目が限り無く爆笑に近い形に細まっている。絶対真面目には  
謝っていない。

「おい暁、この私を舐める奴には漏れなく天罰を」 「下され  
るのはお前だ、こんのバカ娘！！」

怒号と共に夕紀の脳天に拳骨げんこつが落とされた。

「痛っ……何しやがんだクソ親父イっ！！」

痛さの余り目尻を潤ませつつ、後方を射殺さんばかりの眼差しで睨  
む夕紀。しかし、その眼差しを向けられた夕紀の父も負けてはいな  
い。

「お前、『帰ったら速やかに任務完了報告をしろ』と何度言えば解  
るんだ！このバカ娘」

「あん？ゴチャゴチャうつせえなクソ親父。私は今疲れてんの。帰  
って早々苛つかせん。失せろ。」

夕紀が平然とそう言い放った瞬間。夕紀の父の表情が引き攣り、額  
に血管の筋がうつすらと浮かんだ。

「…あ  
」

直感的に何かを悟ったのか、暁の口からその声が漏れた、次の瞬間。

「夕紀……いい加減にしろこのバカ娘がア……！！」

夕紀の父が遂に本気でキレた。ついでに鞘に収めていた刀を取り出  
し、「お前のそのひねくれた根性、俺が一から叩き直してやる。覚  
悟しろっ！！」

事もあろうに実の娘に刀を向けた。そして夕紀はというと「おっ、  
良いねえ」。私も丁度特訓したかった所だよ。「そんなことを笑顔

で言つて、父と同じく刀を抜く。夕紀も夕紀だが、夕紀の父も大人気ない気がしなくもない。まあ、これも親子のコミュニケーションの一つみたいだし、別に良いんだけど。

「警備人に乱闘騒ぎと思われぬ内に終わらせときなよ。」  
まあ、二人の親子喧嘩は最早妖魔退治屋の集落地の毎日名物であり、警備人にも既に黙認されているのだけど。

込み上げる笑みを隠すように暁は後ろを向いた。直後、堪えきれず押し殺した笑い声が漏れたが、同時に刀が交差する高い音が鳴り響いたのに打ち消され、運良く喧嘩っ早い幼馴染みの耳に届くことは無かった。



## 02 見掛け倒しの王子さま

二十分後。本日の退治屋集落の名物公開は、いつの間にか出来ていた野次馬の波を掻き分けてやってきた母親の「二人共、今日も元気一杯ね〜。」の一言と満面の笑顔によって強制終了させられた。父とは違って夕紀のやることに口出しは殆どせず見守ってくれる、いつもにこやかで穏和な母親だが……今は、そのにこやかさが畏怖の念を倍増させる。

「夕紀ちゃん、お父さん、終わった？」

先程の手合わせで巻き起こった土埃が酷く付着してしまったブロック塀を磨きあげたり、酷く汚れた服を洗濯したりとそれぞれ後処理をしている父と夕紀に、変わらず笑顔の母親が問いかける。

『もう少して終わります…』

「そう。やっぱり二人は頼りになるわ。」

満足げに頷く母親。何だか、この人には一生涯掛けても敵わない気がする。

「あ、夕紀ちゃん。ちょっとお願いがあるんだけど…お父さんから聞いた？」

「へ？えと…何を？」

首を傾げてみせると母親は一瞬、父親を一瞥。父親は若干青ざめ、手を合わせて必死に許しを請い始めた。普段、夕紀には尊大な態度を取っている父親だが、最強の存在は母親のようだ。普段から薄々気付いてはいたけど。

「お願いって何？」

問うと母親は視線を夕紀に戻し、「今度、国主宰の全部族交流会が

あるじゃない？それに際して、各部族の長が代表して今日王族の方々と謁見する事になってるんだけど…お父さんもお母さんもちょっと、用事が出来ちゃって行けないの。だから夕紀ちゃんが行ってくれないかな？」

「はあっ？何で私が？しかも王族と謁見って。」大体、そんなものに参加したら「身分制度とかつまらない事を強要されそうじゃん。私、そういう無理。」

「どうか、そう言わずに…」母親は困ったように笑う。この謁見は交流会についての相談会でもあるから、夕紀には絶対に行って貰わなければ困る。だが彼女はかなり強情な性格。さて、どうしたものか…。考えを巡らせていた、その時。母親の脳裏に、いつも夕紀が暇さえあれば本人（？）の意思に関係無く散歩に連れ出している、クリーム色の体と淡紅色の瞳を持つコリーに似た暁の飼犬の姿が浮かんだ。「…それに、さすがに夕紀ちゃん一人では危ないから暁くんと紅霞こうかが付いていってくれるって…。」

本人（犬）達には聞いていないけど。多分了承してくれるだろう。というか了承してくれなければ困ったことになる。紅霞の方は、特に。

「紅霞が！じゃあ行く！」

満面の笑顔で夕紀は即答した。

同じ頃。ここは、虹霓国の王宮廷、光架城。その最上階の、ある一室。

「ねえ、マジで俺が公務やらなきゃいけないの？はあ〜めんどくせ…。」

緋色の椅子の背もたれに身を預け、大理石の机に組んだ両足を乗せるといふ、王宮人に似つかわしいとはお世辞にも言えない格好をしているが顔立ちをよく整った少年が、右手で電子端末を弄り、左手

で赤茶色の髪をわさわさと手申ししながら不満を口にしていた。

「申し訳ありません昂哉様（こびり）…ですが、王様のご様子が芳しく御座い  
ませんので…」

質は良さそうだが質素な紺色のロングスカート、恐らく下働きの身  
と思しき女性は申し訳無さそうに瞳を伏せ頭を下げた。少年

昂哉は尚も不満大有りだと言わんばかりに、微塵も繕う事なく端  
整な顔を歪ませる。

少しして、昂哉は不意に顔を上げ、何か言いたげに女性を見  
つめた。

「昂哉様…な、何か…？」

「本当に、俺がやんなきゃ駄目なの？何で俺なの？てか今日の公務（しごと）  
つて今年度の交流会についての超重要な話し合いなんでしょ？俺み  
たいに見た目が軽く（チャラ）て王族つばさの欠片もない奴が顔出したらまず  
くね？」

自分の言動ひとつで王族の立場が崩壊する可能性を危惧しているの  
か、そんなことを言い出す昂哉。単に仕事をしたくないだけに見え  
なくもないが、恐らくは考え過ぎだろう。

「やっぱり、どうにもならない？」

その瞳が切なげにウルウルし始める。

「えっと…昂哉様…」

女性は困ったような顔をして昂哉から視線を逸らす。女性を見つめ  
る昂哉の瞳には、捨てられる寸前の子犬が向ける眼差しのような、  
猛烈に保護欲をくすぐられる何かがあった。「あ、えと…私が口出  
し出来ることではないので…」

言葉を紡ぐ間にも昂哉の瞳は潤いの度合いを増してゆく。明らかに  
演技なのだが、そうだと解っていても心を揺さぶられずにはいられ  
ないほどの力が昂哉の瞳の奥に宿っていた。

「こ、昂哉様申し訳ありませんが、『皇帝規定法』の第二章第四条項目其の七にて、『王が何らかの支障により統治行為を遂行することが出来ないとき、特例として王位継承第一位の権限を有する男子がそれを代行する』とあります。どうかご理解を…」  
目を瞑り、必死に言葉を絞り出す女性。目を合わせてしまったら、今度こそ確実に落とされてしまいそうだ。

「はあく仕方無いな。解ったよ。」  
溜め息をつき、伸びをする昂哉。

「　　ところで、それって何時頃から？」

「あ、14時からです。」

「14時…ってあと一時間半くらいしか無いじゃん。結構やばくね？」

「ええ、やばいです。…ですから電子端末など弄っておられる暇は御座いませんですよ、早急にお召し物をお改め下さいっ」

「へいへい、解った解った」

言葉遣いを注意しようとした女性を柔らかな笑顔で惱殺すると、昂哉は部屋を後にした。

「うっ…っ、似合わなすぎる…もう嫌だあ〜！」

夕紀は姿見に映る自分に向かって怒鳴った。彼女は今、左胸に桜花のコサージュが付いた白いワンピース風の衣装に身を包んでいる。いわゆる正装というやつだ。普段は特にケアもしていない、背中の真ん中辺りまで伸びた線の細い黒髪も母親によって高い位置でポニテールにして貰い、おまけに桜色のシユシユまでも。元々細身で背が高く、目鼻立ちがはつきりしている夕紀にはよく似合っていたが本人にその自覚は皆無で、先程からずっと先述のような調子だ。

「夕紀、人生において諦めが必要になってくる時もある。ていうか全然変じゃないじゃん。…可愛いよ。…さて、もうそろそろ行かないとやばいぞ。」

「行ってらっしゃい暁。私は行かない。絶ッ対すっえに行かないからッ！」  
そう言うと夕紀はベッドにダイブし、苛々しているのか手足を激しくばたつかせながら「何でこんな事に」「似合わなすぎる」「正装なんてやってられるか」等々、様々な不平不満をばやし始めた。反抗期真っ只中の子供か。

「駄目だこりゃ」

暁は苦笑すると、夕紀の自室の扉を少し開け、廊下で待っていたコリーの頭を撫でて「夕紀はどうしても行かないっていうから俺達だけで行こうか。」

『え〜…ユウキがいないとつまない〜。』

人間の年齢で十歳にも満たなそうな、幼い男の子の声が返ってきた。紅霞は部屋に入っていく、ふて寝している夕紀に近付くと甘えるように擦り寄りながら『ユウキ〜いっしょに行こう?…ユウキはコウカのこときらい?』

「大好きだよ。行こう」  
十秒前までの絶対的な拒否反応は何処へやら、即刻飛び起きて満面の笑顔で紅霞に抱き付く夕紀。

「…さて、行きますか。紅霞、悪いけどお前が送ってくれるか？時間無いから」

「わかった。じゃあ、まだ開けて？」

暁が窓を開けると紅霞は地を駆けると同じように宙へ飛び出し

元の状態の倍はあるとかという大きさに変わった。更に少し細身になり、風貌は犬より狼に近い。『体長が倍になる分、細身でなければ体が重くなりすぎて動けなくなるから』という主旨の発言を聞いたことがある。

「じゅんびかんりようつ。乗っていいよ」

その言葉と同時に二人は紅霞の背に飛び乗った。紅霞は高らかに一声咆哮すると、天上からの光を受けて白く煌めく光架城に向け、軽やかに蒼空を駆け抜けていった。

「皆様、ようこそおいで下さいました。本日は王の御容態が余り芳しくない為、私、虹霓国第一王子の昂哉が代行させて頂きます。どうぞ宜しく。」

その声は光架城の社交大広間、開け放たれたままの扉の奥から響いてきていた。夕紀達を含め各部族からの代表者が横一列に並ぶ、その目の前には柔らかな微笑みと優美な立ち居振舞いで御辞儀をする美少年。その姿に、その場に居る全員が息を呑み、見入っていた。

夕紀や暁以外は。

「ふわあ〜かったる〜。早く帰りたいよ暁…。てかあの人の笑顔胡散臭い」

「俺も同感だよ夕紀。ああいうのって大抵、見た目は良いけど中身が残念なパターンなんだよな。」

王子が列の右端から順に、一人一人と挨拶を交わし始めたのを横目で見つつ言いたい放題な二人。直後、部屋の出入口に立っている護衛兵が咳払いをし、暁は「あつ」と呟いて口を押さえる。もう少しで『王族に対する不適當発言』罪でみつちりしごかれるところだった。

「全く…何やってんだよ暁。」

「あはは…ごめん。」

全く悪びれずに笑っている暁の脇腹に、夕紀が容赦なく軽く拳を叩き込む。それと同時に「討魔士の部族の方々ですよね。見た感じ、俺と同じ年くらいっしょ？もし敬語とか嫌なら別にタメ口でも構わないから。」

「へっ？」

思わず顔をあげると、三日月を下向きに変えたような形の瞳に、年相応の少年らしい、無邪気で悪戯いたずらっぽい光が映っていた。

昂哉は視線で出入口の方を示し、「ほら、見張りの奴らがようやく消えた。多分、来賓歓迎の宴の準備しに行ったんだろっな。って訳で皆も楽にして良いよ〜。…っあ〜、疲れたあ…。」

そう言うなりキツチリと着こなしていた上着のボタンを全開にし、えんじいろ臙脂色のネクタイを外すと椅子にどっかりと深く座った。先程までの王族らしさは完全に霧散し、そこら辺に普通に居そうな少年という感じだ。

「え…と、王子？」

「ん〜何？」

「なんか……人間ひとが変わってませんか？」

夕紀がいうと全員が同感だったらしく、小さく頷いているのが視界の端に見えた。

「そうかもねえ。まあこれが俺の素だし。護衛が居ない間だけでも良いから、ちよつと王子キャラから解放させてよ？な？」

そう言いながら笑顔を全開させる。直後、夕紀と暁の背後で何かが立て続けに崩れ落ちる音がした。…恐る恐る振り向いてみると

……

「うわぁ……」

王子の素敵な笑顔に殺られてしまった、哀れな少女達が至福の表情で床に折り重なり倒れていた。彼女達に紅霞が近付き、鼻先や前足でつついて『おねえちゃん達、こんなところでおひるねしたら、カゼ引いちゃうよ？』などと少し的外れな注意をしている。

「……王子。今年の交流会はどんな事をするんですか？」

後方に広がる光景は見なかったことにすることを決め込んだ暁は、ちらちらと後ろを気にする夕紀を回れ右させつつ昂哉に問う。

「ん〜？まあいつも通りな感じじゃね？」

「あの…私達、今まで交流会に参加したことなくて…。」

「え、マジで」

昂哉は意外だという風に目を見開く。

「えと…行きたいなとは思っていたけど、退治屋っていう身分上、やっぱり仕事優先なので…。」

「ああ、解る。俺も『ああ、なんか今日は思いつ切り外を駆け回りたい気分だな』とか思っても公務に時間潰される、つてのがよくあるよ。サボるうにも誰かが監視しててめっちゃキレられたり。」



「そうそう!! キレられるの物凄くウザい。」

「…なに意気投合してんだよ」

何故かメチャクチャ不機嫌そうな声で暁が呟く。その冷淡な瞳は夕紀とかなり仲良く話し込んでいる昴哉へと向けられている。

「ん、どうしたの暁? どこか痛いのか? 大丈夫?」

「へっ……あ、うん……」

不意に漆黒の瞳が覗き込んできて、思わず目を逸らす。その先に、何だか楽しげにニヤつきながらこちらを見ている瞳があった。

「……何見てるんですか」

「ん、別に? 『青春だね』なんて思ってないよ」

「それって思ってるって事ですよね王子!?!」

昴哉に食って掛かる暁を見つめ、夕紀は不思議そうに首を傾げる。

だがすぐに柔らかく笑って「暁って、色んな人とすぐに仲良くなれるよね。羨ましいなあ」

「いや、それは違うから。…ほら、夕紀は倒れてる人達を起こして…王子。我々の部族が今年の交流会で催しを希望するものの議案書です。」

倒れてる人(主に女子)を紅霞と共に起こしている夕紀の方を頻りに見ながら、昴哉に議案書を差し出す暁。

「お、ご苦労様。…剣技の自主練習トレーニングの一般公開に各自のパートナー動物との演戦…。すげえ、超楽しそう」

「そ、そう…?」  
年相応の無邪気な笑顔を見せる昴哉。そのテンションの上がりように、夕紀と暁の方が戸惑ってしまう。王子キャラの時とは違う、本当に心からの笑顔だと解る。

「んじゃ、退治屋さんの催し物はこの二つの内どちらかって事で

……」

「 昂哉様、来賓歓迎の宴の準備が完了致しました …… っ  
昂哉様、何ですかそのお姿は！早急に御直し下さい！！」

「げ…っ」

大広間に入ってきた、白髪混じりの見るからに神経質そうな男性を見て昂哉は眉を潜めた。

「 …… だつてさ、ネクタイ息苦しいし上着も合っていないだもん。」

「何を仰おっしゃいますか貴方は！御召し物は後で御直し致しますから、とりあえず今は御召し下さい。」

「 …… ハイハイ」

面倒臭そうに応え、昂哉は無造作に投げ捨てていた上着を羽織り、ネクタイを閉め直す。

それが終わると、執事の先導に従って夕紀達は宴会の間へと向かった。

## 04 運命の柵（しがらみ）

村に帰ってきた夕紀は何故かふてくされていた。

自室内をを右往左往したり何もない壁を睨み付けたりと、端から見ればちょっと危険<sup>アレ</sup>な人だ。

「ゆ、夕紀ちゃんどうしたの…？ 謁見で何かあったの？」

お菓子を運んできた母親が優しげな声音で問う。夕紀はちらりと母親に視線を寄越し、やけに静かな、いや、感情を抑えた声で「…謁見はどうでもいいんだ。その先。来賓歓迎の宴だよっ」

机に何度も拳を打ち付け、引き出しを足で蹴る夕紀。そのうち机が変形しないか心配だ。

「来賓歓迎の宴？ まあ…何か特別な行事があった場合に催される食事会のこと！？ それは良かったじゃない」

「いゝや…良くないんだそれが。…あんの踊り子があゝ！！」

夕紀は雄叫びをあげながら椅子を揺する。

「踊り子？」

「食事会の時に、その場の雰囲気<sup>キョウキ</sup>を華やかにする為か、王族専属の踊り子が『宴の間』のステージで舞ってたんだけど…その内の一人が…っ」

唸り声を漏れると同時に蹴りの速度が加速する。

「お、落ち着いて…。その子がどうしたの？」

「やたら客席に笑顔やら、ウインクやら投げキッスやら愛の告白的な台詞やらを撒き散らしてさあ…。せつかく静かな昼食が摂れると思ってたのに、そいつのお陰でうるさかったのなんのって…！」  
言いながら、自分がいつも就寝時に使っている、白地に水色の水玉

模様の抱き枕を殴り付ける。

「しかも司会進行役が『全部族交流会の意義について』とか言って、興味ない昔話を延々と話してたりしてさ！」

「……夕紀。」

「……………へっ？」

不意に変わった口調に、夕紀は思わず顔を上げた。合わさった母親の視線にはいつも通りの穏やかさと、真剣さが在る。

「その昔話…少しでも覚えている？」

「へっ？…いや…特には」

「それでは駄目よ。」

母親の眼差しはひたすら真剣で。いつものように笑って流したり出来るものでは無かった。

「今から話してあげるから。しっかり聞きなさいね」

その言葉に夕紀は自然と頷いていた。

「『虹霓』と私達の国、『黒鬚』は古の時、両方の国家を巻き込んだ歴史的戦乱を繰り広げた。」

古文書と思しき数々の書物や巻物が所狭しと収められた、薄暗い部屋の中でそう言ったのは、夜の闇をそのまま閉じ込めたような大きな瞳を持つ少女だ。

「結構、互角な戦いだっただね。…だけどね、」

古文書の一冊を手に取ると迷いなど一切無い手付きで捲ってゆく。

そして、あるページを見付けると同時に手を止め、「虹霓にはその戦乱を止める為の、ある『秘宝』があっただね。」

少女は顔を上げ、次の言葉を待つ従者達を見回す。その虚ろな瞳を、少女の瞳に潜む闇が飲み込み、黒に染めてゆく。

「ねえ、皆」

笑いかける瞳が、鋭く光る。そして、言った。

「もうすぐ、虹霓で催しがあるのは知ってるよね？…時間は満ちた。今こそ、私達の歴史をやり直す時だ。…さあ、始めましょうか」

少女は窓の外へと目を移す。西の空の端は、全てを焼き尽くす鮮烈な業火の色。東の空はその業火ごと飲まんとするかのように、薄暗い闇が迫ってきていた。

「……でね、戦いは虹霓がその秘宝を使ったことで一応休戦という形になったんだけど…。以来、黒翳の人達はずっと私達を憎んでいて、隙を突いていつか私達に再襲を仕掛けようと目論んでいる。そろそろ危ない時期なの。」

「どうして？」

「その時に秘宝に施された封印が、永い時間が経ったことでそろそろ自発的に破られてもおかしくない時期なの。だから今度の交流会では絶対に封印の更新をしなくてはならない。その為に、私達国民の目に触れる場に秘宝を晒す事になる。黒翳が秘宝を強奪

するにはこれ以上無いほど都合の良い瞬間よ。だけど強奪されてはならない。絶対に。秘宝に関する書物の中に『この宝、陽の処へ導かれるは不変静穏。陰の処へ誘われるは世情荒廃』という言葉があるんだけど…聞いたことくらいはあるわよね？」

「うん…。」  
夕紀は静かに頷く。いつだったか、父親が『虹霓の民の心を一つにするには欠かせない言葉だ』とか言っていたのを聞いたことがある。あまり深い意味までは解らなかったけど…。

「あ、もうこんな時間。暁くんの家で剣技特訓があるんでしょ？行かなくて良いの？」

「あ、そうだ忘れてた！行ってきます！！」  
壁に立て掛けていた、愛用の紅の刀を掴むと夕紀は慌ただしく隣家へと駆け込んでいった。

遠ざかってゆく足音を聞きながら、母親の口元の笑みは掻き消えてゆく。

何故、今なのだろう。何故、娘達めいらなのだろう。抗う術はないと知りながらも、やるせなさは拭い切れない。卓越した剣技や妖魔退治の腕も、来たるべき瞬間の為に用意されたものであるとするならば。抱く想いは賞賛ではなく、絶望が襲ってくるばかりだ。

目の奥が熱くなってきて、網戸を締めた窓辺に足早に駆け寄り空を仰いだ。

天上には幾つもの星々が淡く瞬き、剣が交差する高い音が夜風と共に鼓膜をくすぐる。

…こんな、安穩な毎日が続けば良いのだけど。何かが動き出そうとしているのが何となく解ってしまう。

それは、夕紀ゆいが『選ばれた』からだ。彼女が生まれてきた時から定

められていた、運命という名の柵。しがみ

「なんで、夕紀が……。」

誰ともなく発せられたその問いに応えうる者は居なかった。

## 05 隣村の少年少女

2週間後。遠くに見える森林の彩りが移ろうのと張り合っているかのような早さで、交流会の準備は着実に進められていた。

本日、夕紀達は演戦の備品類 刀の元となる鉾石や砥石、演戦時の万一の負傷に備えた治癒薬などを、隣村の調薬師の村へ買い出しに来ている所だ。

「え〜と…紅石が20、碧石15、緑石20、そして療薬が50  
……って、多すぎだ！！嫌がらせかよ、あんのクソ親父い！！  
！」

「ゆ、夕紀落ち着いて…目立つちゃうよ…。」  
「知るかそんなモン！！」  
買い出し班として一緒に来た女子達が宥めるが、夕紀は治まらない。気に入らないものは気に入らないんだ。

「夕紀、落ち着けよ…。後でこの村のお菓子でも奢ってやるから。」  
買い出しは基本的に女子の役目なのだが、「男子の方の仕事（試合場建設など）は余裕があるから多少遊んでいても大丈夫」ということで何故かついてきた暁が苦笑混じりに言う。…まあ、心配なのだろう。夕紀に買い出しに来られた店の今後が。

「本当に！一言は無しだからね！！わあい」  
一気に機嫌を直した夕紀は、買い忘れの有無を確認するとレジに向かった。

レジには小柄だが恐らく夕紀と同じくらいの年頃だろう、焦げ茶色の髪を一つに束ねた少女が、癒し系垂れ流しの微笑みを湛えながら



手元のメモ用紙に何やら落書きをして遊んでいた。

「あの〜…良いですか？」

「あ、すみません〜。」

予想通りのんびりした声で応え、ゆっくりした動作で会計を始める。その間、夕紀は何気無く少女の手元のメモ用紙に目を落とした。そこには鉛筆描きでも十分にそれと解る、紅葉まんじゅうや団子等のデッサン。お腹が空いているのだろうか？

「え〜と…そうだなあ…交流会準備期間だし、特別に49720ウイングで良いですよ〜。」

店番をしていた女の子が穏やかな笑顔でそう言い、夕紀は我に返った。

「え、嘘。……なんか安くして貰いすぎてる気が…」財布を取り出そうとしている格好のまま固まる夕紀。因みに、1000ウイングは現代の100円くらいだ。つまり、夕紀達は大雑把に考えて5000円くらいの買い物をしたことになる。サービスして貰ったことを考慮したとしても、鉱石やら医薬品を買えるだけ買い込んで約5000円とは、本当に安い。またもに買ったら現代通貨価値で3万円を下らない、というくらい的大量買いだというのに。

「良いの良いの。あんまり高額の買い物されたら計算するのも面倒だしねえ〜。」

「…ん？」

今、物凄く本音っぽい台詞が聞こえたような…。

「では50000ウイングからお預かり致します〜。」

「…あ、うん。」

…まあ空耳という件事としておこう。きっと、気のせいだ。うん、きっと。

「では280ウイングの御返しで…あ、そうだあ。」  
女の子はレジの内側から何やら大きな箱を引っ張り出し、「お店に来てくれたお礼に、この中から好きなのを一つあげますよ」。何が良いですか？」  
そう言いながら箱を開け、夕紀の方に寄せる。箱の中には、楕円形の紅玉が嵌め込まれた指輪や四つのハート形にくり貫かれた淡い薄紅の石が合わさりクローバーを象かたどっているデザインネックレス、透明な石の中に朱色の石の欠片が紛れていて光が当たると石の中で炎が燃えているように見えるブレスレットなどが納められていた。

「ん〜…じゃあブレスレット下さい」

「はいはいまいど〜。これ綺麗ですよねえ…よし、オッケー。」

「あ、有難う…ございます。綺麗…。」

ブレスレットを撫でると店内の灯りが反射して淡く光った。

「大切に扱ってくれなくても良いけど気に入ってくれたら嬉しいな〜。」

そんな、自虐的なことを言う少女に夕紀は笑って「いやいや…大切にしますよ。…あなた、名前は？」  
「彩葉いろはって言います。宜しくです〜。」

相変わらずのユルい口調で言っ、お辞儀する彩葉。

「えっと…そんな、恭しくしなくても良いで…良いよっ。普通の話し方で。宜しく、彩葉ちゃん。」

「い、彩葉、そろそろ店番代わるよ?」

声と共に店の奥から少年が出てきた。

その背丈は現在約155センチメートルの夕紀より少し高いくらいなので、1…60センチメートル位だろうか?随分と猫背で、本当の所は解らないけど。

「…い、いらっしやいませ…。あ、あの…な何か?」

無意識にジロジロ見ていた夕紀の瞳から逃れようとするように、少年は身をすくませ固い笑みを作る。長く伸ばされた前髪で良くは見えないが、恐らく困惑しているだろう瞳で見つめ返してきた。

「君は相変わらず人見知り激しいねえ雷斗らいてう。このお方は夕紀ちゃんだよ。」

「いや、そんな丁重に扱われるような身分じゃないです…。まあ、宜しく。」

夕紀が何気無く差し出した手にも少年　雷斗はびくりと肩を震わせ、恐る恐るといった体でその手を見つめる。結構な対人恐怖症なようだ。

「…あ、ごめんなさい。…：：：そ、そんなにビクビクしないでっ」

もう、やけくそだ。思いきって雷斗の黒髪をクシヤクシヤと掻き回す。目を完全に覆い隠していた前髪が無造作に掻き分けられた

刹那。

「…」

息を呑むのも無理はない。怯え混じりに逃げ惑う瞳は周りの人間とは違う、澄んだエメラルドグリーンだったのだ。

だが、それも一瞬のこと。雷斗は直ぐ様きつく目を閉じた。それに対して夕紀は

「……綺麗……」

無意識に出た言葉。嘘偽りは一切無い、本音だ。こんなに綺麗な瞳は見たことがない。

「え……」

きつく閉じていた瞳を、雷斗は大きく見開いた。

『綺麗』なんて、今までは誰からも…。今自分の隣に立っている、穏やかな微笑を湛える少女以外には誰からも言われたことがなかった。

「……………」

雷斗は口を閉ざし、俯いた。

「あ…えと…ごめん？」

「ジロジロ見て悪かった、綺麗な瞳だったから…つい、な。…悪かったよ。」

雷斗の前髪を元に戻してやりながら暁がすまなそうに言う。

「ただ、やはり綺麗だと思う。周りとは違う色とかそんなのは関係なく。純粹に。」

「私、瞳は真っ黒だからさ。君が羨ましいよ。そんな綺麗な色してて。」

「私も好きだよ。前髪、何だか邪魔だな。くくってやる。」

「わ、ちょ彩葉…。」

慌ててガードしようとするが時既に遅し。実に鮮やかな手さばき(?)で雷斗の前髪は一つに纏められてしまった。

「うう…。」

今度こそ、本当に顔を上げられないとばかりに雷斗はレジに顔を押し付けた。それを良いことに彩葉は自身が彼の頭髪に施した細工を引っ張ったり軽く叩いてみたりして遊んでいる。結構ひどい気が…。

「そんな、瞳の色なんて気にしないで。雷斗は雷斗でしょ。」

「そつだよ。普通に目が黒い俺としては羨ましいと思うよ？超綺麗じゃん。」

夕紀と暁はこれでもかと褒めちぎってみるが、雷斗は顔を上げなかった。だが、二人は全く気にせず、続けて言った。

「ねえ、雷斗って呼び捨てで呼んで良い？」

「まあ拒否られても呼ぶけどな。」

そんな、勝手な…。そうは思ったが、喉元までせり上がってきたその言葉が口に出る事はなかった。そんなことより、なによりも

……。

「…うん。」

嬉しかった。

思わず口元が緩む。

彩葉<sup>あのこ</sup>以外で、初めての

……友達だ。

「… って、やべっ！もう少して集合時間だ。お前のお父さんがキレる前に帰るぞ夕紀！」

「あ、うんっ！じゃあまたね二人ともッ…って天気悪くなってきた…。最悪く帰るまで降るなよ…。」

「うん、またね。」

「あ、ありがとうございましたっ」

穏やかな笑顔で手を振る彩葉と雷斗。しかし、その声に応える間もなく夕紀と暁、その他の女子は村に向けて全力疾走していった。

更に空高く、遠い場所<sup>とこ</sup>。  
黒みを増す雲に紛れ、薄暗い色をした龍が低く鳴いた。瞬きのたび、  
雷光の如く瞳が光る。

「……『歴史』は、繰り返すものだ。……また、一緒に遊ぼう……？楽しみにしてるよ……。」

## 06 交流会の朝（前書き）

すっかり季節が移ろった、とある朝。

「…今日か。」

廊下の窓の一つを開け、朝焼けの光を淡く滲ませる薄曇りの空を仰いで昂哉は呟いた。網膜に淡く訴えかけてくる光を瞼越しに感じる。暖かい。

瞼を上げ、視線を前に戻す。庭先に咲き群れる秋桜が真つ先に目についた。幾分か涼しくなった風に揺れる、優しい桃色に目を細める。

「昂哉ユウガ。」

「わ…っ！」

突如、鳴った声。驚いて身を固くすると同時に、フローラル系の香りを身に纏った少女が抱き付いてきた。一瞬前のめりになるが何とか堪える。

「…百合花ゆじか。おはよう。」

さりげなく体を振りながら対人用の爽やかな笑顔で挨拶する昂哉。本心としては「気安く触るな」とか言っつてやりたいが、この少女

百合花にそんなことをしたら色々面倒なことになる事を昂哉は知っていた。

「あ〜ん、コウ何で逃げるのよ。」

頭の高い位置で部分的に二つに結わえた、少し赤みがかった茶髪を揺らしながら頬を膨らませる百合花。少しつり目がちな、アイメイクの影響もあってやや目力の強い上目使いが昂哉を捕らえる。

「ベタベタされるのは嫌いなんだよ。」

「昂哉ったら…百合花が可愛いからって照れちゃって。」

「違う。…はあくただでさえ今日は気が重いんだからさ。疲れさせないでくれよ…。」

「……うん…ごめん。」

「ほへっ?」

意外にも素直な反応に、昂哉の方が気の抜けた声を出してしまった。

「…ねえ」

先程とは打って変わって、静かな声を紡ぐ百合花。

「ん?」

「昂哉…。大丈夫、なんだよね…?」

「何をいきなり…。」

反論しようとした言葉を飲み込む。百合花の表情には痛切に、懸命に何かを想っているのがハッキリと現れていた。

「百合花は昂哉が嫌な目に遭うなんて、嫌だよ…。」

「…そんな心配しなくても大丈夫だって。」

「嫌なの…っ!」

百合花の瞳が揺れる。まっすぐに見つめてくる瞳。…そんなの、逸らすより他に無い。

「…大丈夫だって。まだ交流会で『何かある』って決まっている訳じゃないんだから…。」

それは、『何も無い』と決まってる訳じゃないのと同義だけど。願うしかない。



本当は、何もない訳がないと解ってはいるけれど。

「…とりあえず、天气が崩れない内にやらないとな」

奥の方にうつすらと見える山の陰影。それを取り巻く、やや薄暗い色をした雲を見つめながら昂哉は呟いた。

## 06 交流会の朝

「暁。は、や、くツ！」十分に昇りきった日の光が照らす、緩やかな坂道を夕紀と暁は駆け抜けていた。

「ああ解った、解ったけどお前、速すぎ……。あと、テンション高すぎだよ」

「暁が遅いんでしょう？早くしないと置いてっちゃうよ。せつかくの交流会なんだから気が逸るのも仕方ないじゃん？」

「そう言つて小首をかしげてみせる夕紀。すかさず暁は視線を逸らし、  
「…そ、そう。　　なんか夕紀、幼い子供みたぐはあッ」

不自然に紡がれた語尾は恐らく、彼の腹に寸分誤らず真つ直ぐ突き刺さった圧力によるものだろう。

「…誰が幼子みたいだつて？おいコラ」

女らしさの欠片もない言葉遣いで、足元に沈んでいる暁を爪先で小突き睨み付ける夕紀。警備人が通り掛かったら間違ひなく暴力沙汰だと判断されかねないだろうが、夕紀の脳内にはその可能性を思慮するという思考回路はこれっぽっちも存在していない。

「…ごめんなさい」

「よろしい。」

低く呟くと夕紀はやけにあっさりと身を引いた。暁は上体を起こし、意外そうに夕紀を見つめて「夕紀が素直なの久し振りだ。そっぴいや今日あんまり天気良くないし。どうしよ、俺…、今日傘持ってきてない…。」

「　　確かに天気良くないけど、失礼にも程があるわ〜!!」

「お…落ち着くんた夕紀。話せば…」「解ろうなんてこれっぽっち

も思っていないから てか朝から駆け足でちょっと疲れたでしょ暁君。ちよつと永眠ねむって良いよ」

「ちよ、待って話を聞…ぎゃあああ ……」

断末魔の絶叫が、紅と黄とのグラデーションが目にも鮮やかな山々に木霊こだました。

隣村との境目にある広場に向かうと、中央部に聳そびえる大木の傍には既に人影があった。

「あ、夕紀ちゃん。こっちですよ。」

柔らかく間延びした声が自分を呼ぶのを聞くと、夕紀は顔を上げ、フレンドリーな笑顔で手を振り返して

「おはよう、彩葉ちゃん。…あれ？雷斗は？」

「居るよ。ってことで出てきましょうね〜雷斗クン」

「わっ、ちよ、彩葉引っ張らないで…」

口では僅かな抵抗を試みつつ、大人しく木陰から引きずり出される雷斗。

「彩葉ちゃんってたまに強引だよね…おはよう、雷斗」

「お、おはようご…じゃなかった、お…おはようっ」

出会ってから既に二週間経っているというのに、その声音は相変わらずぎこちない。もっと普通に話してくれても良いのに。そういった意味合いを込めて、出会った時同様に雷斗の髪をわしゃわしゃと掻き回す。

「な、何…っ？」

「髪、ふわふわしてて触り心地良いね〜。気に入った。」

柔らかく微笑むと、雷斗は困惑と照れが半々といった感じの小さい

笑みを浮かべた。

その時、広場の一角に設けられた音響装置スピーカーから、鍵盤楽器ピアノを奏でて  
いるかのような、優しい音楽メロディが流れてきた。夕紀の大分曖昧な記憶  
では確か、音楽は開会一時間半前と一時間前、そして三十分前に開  
会式場所の宮廷より放送がかけられることになっていた筈だ。時計  
台を見上げると、今はちょうど九時半。開会式は十一時からだから  
……今の音楽は一時間半前を知らせるものか。

「ちよつと早いけど、行くか。」

「暁…、今行つてもちよつと…ていうかめちやめちや早すぎるんじ  
やない？」

早く着き過ぎた結果、宮廷の門が開くまで秋風に晒されながら門の  
前で突つ立つてただひたすら待つ…なんてことをしたくない夕紀は、  
心の底から心配そうに言う。

「心配するな。紅霞こうかに空中散歩しつつ向かうように言うよ。滅多に

見られない、虹霓国こうげいこくの全貌を見下ろせるし一石二鳥だろ？」

「嘘、やつてくれるの！？楽しみ…だけどうちの親父にバレた  
ら殺されるね（笑）」

「…まあ、夕紀のお父さんなりに心配してくれてんだよ。仕方ない  
からその時は一緒に怒られてやる。…そんじゃ、紅霞」

『うんっ』

暁のリュックから飛び出すと、紅霞はいつかの様な狼のような姿に  
なった。そして四人がその背に身を預けると同時に跳躍、向こうに  
薄く霞む宮廷へと駆け出した。

次第に色を濃くしてゆく雲で次第にぼやけてきてはいるものの、眼

下の景色は言葉を封じるには充分だった。

夕紀や暁が住む、後方に高低の激しい山脈、東側に野生動物の住まう森林、西側に天然の洞窟を利用・改造した大規模な訓練場がある退治屋（討魔士）集落。

雷斗や彩葉が住む、周りに速効効能のある薬草やリラクゼーション効果のある芳香を漂わす花が自生する、ただっ広い野原に囲まれた喉かな調薬師集落。

その調薬師集落の最東端に掛かっている橋を渡った先には、虹霓国の中で唯一、二部族が共存している魔術師と龍使いの集落。周りを海に通じる清流に囲まれ、中央部にサファイアのような深く澄んだ色をした、龍が住まうと言われる湖がある。

ちなみに討魔士の村の森林を抜けた先にも、動物全般と心通わせる事が出来るという万獣使いの集落がある。討魔士集落と共存はしていないが。

そして、それら集落の中心、虹霓国の中央部に君臨するのが虹霓国を統べる王族の宮廷だ。

その宮廷の庭に咲く、季節を考えれば恐らく秋桜だろう。ピンクやオレンジ色の花が点々と見えてきた。

「…やっぱり空中散歩するにも早過ぎたんじゃない」「いや大丈夫だ。…多分」

「ま…まあ二人共。王宮の裏手に、国民に自由解放してる公園あるから其処でお茶休憩でもしていよう？」

「こんなこともあるのかとお菓子持ってきたよ」。調薬師集落名物、疲労回復効果のある大福です。」

「彩葉ちゃんナイス。いつただき。」  
一人一人に手渡そうとしていた大福を霞め取り、満面の笑顔で頬張る夕紀。さすがに傲慢なのでは…と暁の視線がたしなめるが、微塵も気にしていない。

妙に早いスピードで空を流れる雲も、今までより一際冷涼な風が横切ったのも、刹那、何か黒い影が後方を飛び去ったのも。夢中で大福を咀嚼する夕紀に、察することは出来なかった。

その後裏手の公園に降り立った四人と一匹は大福を食べ尽くし、綺麗に整備され鮮やかな色を開く花壇の花を愛で、心弾む想いで開会式を待ちわびていた。

悠久の歴史の循環サイクルが巡り来る足音にも気付かずに。

狂った歯車は、止まらない。

「……人混み、ギモチワルイ。暁…私帰る。」

大人子供が入り乱れた、妙な息苦しさ<sup>と</sup>暑さが充満する人混みの中で夕紀は呟いた。

「いや、ダメだから。てかお前、交流会楽しみにしてたじゃん。さつきまでの余裕はどこ行つた？」

その隣でやれやれと溜め息をつく暁。そして彩葉、雷斗の順に並んでいる。

お茶休憩を終えた4人が宮廷に行つてみると丁度開門直後であり、秋気冷涼な風に晒されることもほとんど無く宮内<sup>なか</sup>に入ることが出来た。

今、4人を含めた国民達は宮廷内の第一庭園に移動し、二階部から王族の面々が姿を現すのを待っている所だ。庭園とガラス戸一枚で隔てられ、緋色のカーテンが引かれている向こうで時折影が行き来するが、準備にはまだ時間が掛かるらしい。

「…王族か何だかよく解らないけど時間掛かりすぎ。チャツチャとやれよ。」

「無茶言つなよ夕紀。催し物には万全な準備が付き物だろ。」

次の瞬間、夕紀は「あん？」などと非常に品位に欠ける効果音と共に睨みを利かした。だが、それより早く暁が視線を戻し、視線が合うことはなかった。

「…ちつ。」

いつもは私と同じくらいうるさいくせに、何でこつこつ時は澄ました顔してやがるんだ。むかつく。

思わず地団駄を踏みそうになって、前列からの諫めるような咳払いに気付く。そうだ、人前だった。いけないいけない。

ため息をひとつ溢して視線を前に戻す。と、ようやく二階部の扉が開き王族の面々が次々に出てきた。それだけで辺りの雰囲気は柔らかく、明るく、そして敵かなものへと変わった。

そんな、『雅』という言葉を体現したかのような面々が一人ずつ一礼をし、優雅に玉座に腰掛けてゆく。

少しして、進行役なのかただ一人立つ昂哉が柔らかい微笑を穿いて式辞を述べる。次いで、夕紀には既に無用の長物以外の何物でもない、かつて父にも母にもくどいほど聞かされた、交流会の意義と交流会それに関する古の争乱の話が始める。

ああ、はいはい。その話はもう良いよ。何べんも聞いてます。え〜と昔、平和だった虹霓に隣の国からウザイ奴らが邪魔しに来て〜。国内が滅茶苦茶荒れて〜。それが何年も続いたから埒があかない、強行手段だ〜って話になって〜。…で、…どうしたんだっけ？

夕紀が脳内で自問自答しながら視線を戻すのとほぼ同時に、昂哉が傍らの低い机から何かを持ち上げた。

それは幾つか宝石がついた、宝冠だった。ますます黒みを増す雲の切れ間から僅かに射す光が当たると、まるで宝冠全体を光が包み込んでいるように淡く輝く。

「 こちらの宝冠に施された封印は永い時間を経て、徐々に薄れつつあります。ですから只今より封印の更新を致したいと思えます。皆様、身辺の安全確保を充分にお願いします。」  
数刻前まで昂哉の顔に宿っていた柔和な笑みが完全に身を潜めた。



それに合図されたようにある者は最大限のチカラで結界を張り、あ  
る者は己や周囲の人々の身に衝撃無効・減速術を施し、それらのチ  
カラが充分でない子供や年配の人々などは数人の宮廷役人と共に出  
来るだけ奥へと足早に移動する。

全員が各々の最大限の護身策をとったのを確認すると昂哉は、袖の  
方に立っていた、純白のワンピースを身に纏い赤茶の髪を部分的に  
ツインテールにした端麗な少女から白銀の小刀を受け取った。

一度、それを机上に置いて深呼吸をする。端正な面立ちが引き締ま  
る。その眼光は、万物を一瞥しただけで斬り捨てられそうなほど鋭  
い。だが、彼の身を包む雰囲気は意外なほど静かで、穏やかなま  
だ。

「……では、解術を」

「させないよ。」

怪訝そうに昂哉は視線を四方に投じる。

その時だ。

これまで以上に暗雲が立ち込め、淡く射していた光を遮断した。

それも、宮廷の上空だけに。

「え、何？なんか暗いよ」

どよめく人々の中で夕紀だけが、そんな呑気なことを抜かす。

「お前、普通は慌てる所だから！何で落ち着けるんだよ！！」

暁がそう言おうとした瞬間

唸るような雷鳴が鳴り響き、刹

那、強い光が天を引き裂いた。

「何てことを！」

静寂の後、再び時間を動かしたのは女王の声だった。その表情は青ざめ、紅色の口元が痙攣し、時折白い歯がガチガチと音を鳴らす。

その震える視線の先に、所々がひしゃげ、宝石が欠けたり取れたりしている、無惨な宝冠の残骸を映しながら。

「弓手隊は速やかに応戦形体を取れ！！」

数刻前とは似つかない昂哉の声と弓手隊が超人的な脚力で地を蹴り飛び上がるのが、徐々に降りだしてきた雨の中に響いた。

## 08 黒翳潜入大作戦!

結局、今年度の交流会は急遽中止となった。あのような緊急事態があったのだ。誰一人として異論は許されない。

襲ってきた敵方 隣国、黒翳の連中は弓手隊が追いはしたが、過干渉不可領域に入られてしまい制裁するまでには至らなかつたらしい。つい先程まで交流会の合間に出される筈だった昼食が大量に盛り付けられていた、宴会用の長机に両拳を叩き付け、ギリ、と悔しげに奥歯を噛む夕紀の頭に、そっと暁の手が触れた。

「…何？」

多少刺々しさが残る表情で振り向くと暁は、

「交流会が潰されたのは残念だけど、夕紀が…他の人も。誰も怪我しなかつただけでも良かったと思うよ。」

「でも…演戦やりたかつたのに。ああもう、黒翳あいつらさえ来なければ…っ！」

懸命に抑えてはいるが、その声音には行き場のない烈火の如き怒りが滲み出ている。

暁は小さくため息を付き、周りを多少気にするような素振りを見せた後「ちよつと、廊下に出よう。」

夕紀の返答を聞くより先にその手を引き、口々に不安に揺れる心境を述べ合う人々の波を掻き分けて出入り口へと向かった。

「な、何だよ暁？ていうかちよつと手エ痛い…。」

「あ、ごめん。」

暁はすまなそうに微笑を浮かべたがすぐに口をつぐみ、その表情は

真剣なものになっていた。無言のまま、夕紀の背後にある小窓から外を眺める。なんだか見つめられてるように思えて、夕紀は気恥ずかしくなった。昔から人の視線は苦手なのだ。

「で、廊下に出たは良いけど…何か？」

「……………」

「……………暁？」

名を呼べば視線は向くので無視されてはいないのは解るが、暁は何も言わない。いや、言つのを躊躇っているのかも。言葉を発さずとも、幾度となく空気を食するように口をパクパクと動かしている。

「……………じれつたいな、さつさと言わんかいッ」

暁の脇腹に軽く正拳突きを叩き込む。何するんだ、と言わんばかりに瞳を歪める暁。

「目で何か言ったとしても、私には伝わらないよ。口で言わなきゃ。ほら、何か言いたいことあるんでしょ？言つて……………」

「俺、黒鬚に仕返し行くわ。」

あれだけ強情に黙だんまりを決め込んでいたのが嘘のように、心なしか吹っ切れたようにさえ見える滑らかな口調で言つ。

「え、いや…それはちよつとヤバイんじゃない？」

「あいつらは夕紀の楽しみにしてた交流会を潰した。だから俺はその借りを返してくる。」

暁の、その真つ直ぐな眼光は他者に有無を言わせない、鋭く研ぎ澄まされた強さを湛えていた。

「…駄目だよ曉。だって、また『あんな』ことになったら…」

その時だ。夕紀の声と重なるように、宮廷役人の一人が顔面蒼白で駆けてきて、震える声で叫んだ。

「大変です！！宝冠の封印に、欠陥が…！」

「一か八かだったけど、結構上手く行くモンだね。アハハっ」

闇色の少女は黒い小さな珠　宝冠についていた宝石の一部であったそれを右手の親指と人差し指で摘み上げ、愛でているようにも睨んでいるようにも見える瞳で見つめながら言う。

「…でも宝冠ごと奪取までは行かなかったな。残念。満夜の力を以てしても駄目か…。」

「ああもつウルサイなあつ。それは言わない約束でしょ？酷いよ冬司」

少女は、満夜はまるで実齡より遙かに幼い少女のようにプツと効果音を添えながら頬を膨らませる。

「ごめんごめん。…コレ使ってお前に役立つモノ作ってやるから機嫌直せよ。ってことでコレ、ちょっと借りるな？」

冬司は苦笑混じりに笑いながら手を伸ばし、満夜の手から珠を受け取った。

「何に使うの？ていうか無闇に悪用しないでよね？」

「しないよ。」

即答し満夜に柔らかい微笑を返した、その刹那。冬司の瞳の奥の色が変わった。

「冬司？」

「満夜、お客人がいらしたようだ。もてなして差し上げようか……。薄いカーテン越しに伝わる白い光を、黒に陰る小さな珠で透かして見るような仕草をする冬司。」

珠の色で、眼前の世界は暗雲が掛かったかのように半透明に空ろう。ふと視線を向けるとその奥の方に、真剣そのものの表情をした少年と少女が、背丈に不釣り合いな太刀や矛を携えてこちらへと歩を進めているのが見えた。

「ねえ暁？ やっぱり子供二人じゃ危ない……。戻る？」

「ここまで来てそれは無いだろ。」  
心配そうに見上げてくる瞳を暁はバツサリと断ち切る。二人はその後、周囲の目を盗んで宮中の裏手の広場へ向かった。そして、中等魔導学院でいつか習った幾つかのうる覚えな移動魔法を適当に唱えている内に術が作動したらしい、突如巻き起こった竜巻に飲み込まれ、飛ばされて、気付くと虹霓と黒翳の国境である草原の中に大字で寝転がっていたというわけだ。

当たり前だがここに居るのは夕紀と暁の子供二人だけで、おまけに手に持つのは日々の自主練習で刃毀れしまくりの、無駄に長くて重い太刀や矛。素晴らしく扱いにくい。もし残忍な敵に見付かった場合、文字そのままの意味で瞬殺され兼ねない。しかもまずい事に周りは草。下手に動けば音でバレてしまうだろう。とりあえず、風が凪いだらその音に紛れて誰もいない内にこの草の海から抜け出そうと暁は脳内で考えを論理的にまとめて、それを幼馴染みに告げようと振り向いた、が。

「……………」  
今の今まで彼の後ろに居た筈の少女が居ない。緑が波打つのみだ。暁の背中に冷や汗が伝う。まさか夕紀……「おい夕紀っ」  
返答がない。見つかるのを覚悟でもう一度声を張ろうとした、「ふえ？あ、呼んだ？」

彼の立ち位置から約三メートル。頭から背中、更には尻の部分まで土埃や枯葉を付着させた、とても年頃の少女とは思えない風貌の人影が真昼の光を纏って起き上がった。「…やっぱりな…今は『草、良い匂い ふかふか』」とか言ってる場合じゃないんだからな！ほら、起きろっ」

「え〜でも…」  
「言い訳無用っ！…ほら」

半ば強引に夕紀を立たせ、矛を渡す。すると、あれだけ不平不満を愚痴っていたのがぴたりと止んだ。顔を覗き込むと退治屋、いや討魔士に似つかわしい、引き締まったものへと変わっている。

「…夕紀も仕事デキる方だったんだよな、いまいち信じられないけど。」

「あん？暁、私にそんな愚劣バカなことを言っただけで良いと思ってる？よし、そんなに言うなら証明しようじゃないか。暁で。」

「ちよ、止めるい」  
満面の笑顔で矛を構える夕紀から必死に逃げる暁。敵よりも遙かに恐ろしいことを平気でやらかす幼馴染あいてが居ることを、すっかり忘れていた。

「…ま、無茶苦茶なところも嫌いじゃないけど。」  
逃げながら呟き、挑発する為であろう笑顔で振り向く。少女は予測通り額に血管の筋を浮かべ、猛虎のような迫力で追い掛けてくる。

そうしてはいけないだろうが、思わず吹き出してしまった。

「うあゝきゝらゝ…。」

「おおっと、怖いなあ」

笑いながら後ろに流していた視線を前に戻す。

その頬スレス

レを弓矢が掠めた。

「虹霓の方々とお見受け致しますね……。……我が国に何か用かな？」

好感など、とても持てそうにない笑みを称えた、数人の黒鬃の兵達  
が二人を取り囲んでいた。



## 09 疼く記憶

決して取り乱さず、二人は周囲の状況を確認する。黒翳あいての兵は六人さつき射掛けてきた弓手が四人と、細身の気弾砲きだんぱうを抱えているのが二人だ。

「……まったく。暁に付いてきたばかりに超……ッ面倒なことになった。」

「そんな、『超』を強調すんなよ！さすがに傷付くわー！」

「本当の事じゃん。……ってことで逃げるッ」

その声を捨て置き、夕紀は人類が出し得る脚力限界速度を明らかに超越しているだろうスピードで駆け出した。一度、哺乳類最速の速さを誇る、アフリカに生息するあの猫科の動物と張り合わせてみたい。

暁はそんなことをふと考えた刹那、すぐに我に返って「待てよ夕紀」。いくらあの軍兵さん達が、自分らの実力不足を物騒な道具を持つことで誤魔化そうとしている様が痛々しいからって。すぐにトンズラすんのは失礼だぞ。」

そう言っていると暁も夕紀の背を追って駆け出した。もしもこの場に第三者が居たならば、遠くなつてゆく少年の背中に向かつて告げただろう。

「失礼なのはどっちだー！」

パァン！といかにもそれらしい音が響いた。そして、旋風つむじかぜの如く渦巻く『気』が放たれた。『気』は草原の土を掘り起こし、雑草を巻き上げながら寸分たりとも違たがわずに暁の背に接近してゆく。しかし暁は、夕紀の隣に追い付き、急せく必要が無くなった為か、呑気に口笛など奏でながら悠々と歩いている。もしも、あのまま『気』が衝

突など」「　　する訳無えだろ?」

暁が振り向いて口端くちばを吊り上げた瞬間、唸り声をあげて彼に向かっていた『氣』は不可視のチカラに気圧されたように後退を始めた。

「くっ…」

まさか、まだ十二、三歳と見える子供がここまでの実力チカラを持っていたとは、予期していなかったのだらう。軍兵達の瞳は焦りの色で塗り潰される。

「…って、こんな雑魚じぎい奴らの相手してる場合じゃない。おゝい夕紀、置いてくなよ。」

呑気な声が秋風と共に緑の波の上を滑る。

「…ふざけやがって…ッ」

先程、気弾砲をブツ放した軍兵の一人が低く呻いた。彼の内の感情に影響されてか、『氣』が一層、勢いを増した。軍兵は嫌悪感を覚える笑みを口元に浮かべる。　　もつとも、『氣』の後退は治まってなどおらず、軍兵じぎん自身に向かっているままだったが、それに気付く事もなく　　……

「　　寝てる。」

先程、からかうような明るい声を出した人物とは同一とは思えぬ、低く抑えた声音。それが引き金だったと告げるように、気付かぬ内に撃及うつけ確実領域に達していた『氣』が眩い閃光を放った。

「あはは、敵兵あいつら、目エ回してる。さすがは暁。家が武術全般対応の道場だけあるね。」

「まあな。そんじゃ、行こうか。雑魚共に構ってる暇はないしな。」  
「えゝ?まだ遊びたい。」

軽く頬を膨らませる夕紀の背を軽く叩いて気を落ち着かせ、両肩に

手を添えて回れ右をさせる。補足だが夕紀のいう遊びとは、いわゆる討ち合いのことだ。幼少の頃より、夕紀にとって遊びといえば暁や父親との剣術特訓。更に厳密に言っなければ喧嘩だ。

暁としても、最近は交流会に向けて猛特訓に励んでいた大切な幼馴染みを<sup>おね</sup>勞い、何かご褒美をあげたい気持ちは山々だ。ただ、今は場所と相手に難が有り過ぎる。

「村に戻ったら好きなだけ『遊び』に付き合ってやる。あの程度の奴らを相手にしたところで体力の無駄遣いだよ。」

「そっか…そうだね、じゃあ行こ。日暮城<sup>ひぐれじょう</sup>にレッツ、ゴッ。」  
あっさり機嫌を直し、握り拳を天上へと突き上げるジェスチャーをする幼馴染みに呆れ半分、安堵半分の笑みを返しつつ暁も身を翻す。

二人の後方には、いつの間にか起き上がった、言葉ひとつ無いまま虚ろに佇む兵達。

彼らの脳裏には、声が響いていた。

『…なニヲシているノ？ 黒鬃の歴史ヲ阻害するヤツは、

排除シテシマエ。 さア』

兵の一人が弓矢を握った。鈍く光る薄汚れた矢尻が、遠退く背中に向けられる。

「……でき、その時も夕紀が自主練習バツクれて勝手に遊びにいつて。夕紀のお父さんが超キレて〜」「うるさいうるさい覚えてない

知らない。てか黙れ」

夕紀は一抹の情けもなく暁の猫背気味な背中に蹴りを入れる。

「痛。酷えな」

「ムシヤクシヤしてやった。反省する気は微塵もない。まあ、スンマセ〜ン」

「…いつぞ、清々しいくらいの開き直りだな ……」

夕紀に向き直った瞬間、やや空を切り裂いてこちらに向かってくる、鈍色の光が視界の端に見えた。

「夕紀!!」

声に押され、夕紀は思わず地に倒れ伏した。

暫くの静寂が満たす。

「…っ痛……おい何してくれやが ……」

怒鳴ろうと目の前に立ち塞がる人物を見上げた、その大きな瞳が僅かに見開かれる。

目の前で時折揺れるクリーム色の上着に、不自然に滲んだ染みを認めたからだ。

「 …… 暁!」

「…俺の前で夕紀を痛め付けようとは良い度胸だ。その借りは全力で返す……………っ?」

視界がブレ、一瞬暗くなる。口を開ける度に引き攣った音が漏れる。ヤバい、か…も?

そう思った刹那。さっきまで降っていた雨のせいか、少し湿った土

の感触を頬で感じた。

「暁…っ!?!」

いつもの明るい憎まれ口が嘘のように悲痛に裏返った、大好きな声が臆気に掠れてゆく意識の中に響いた。

「暁ッ!?!」

自分でも解るほどに涙に濡れる声。こんな時、思い知らされる。いくら普段強がっても、結局自分は非力だ。大事な人がこんなにも傷付けても、何も出来ない。止められない自責の念。

同時に、思い出した。

いつかと同じ光景

『あの時』も、そうだった。

## 10 孤独な兄妹（前書き）

世界は、決して居心地が良いわけじゃない。むしろ生きづらい。そんなことは解っていた。生来この身に穿たれた、不可抗力の足枷しがらみの存在に気付いた時から。

蹴飛ばすことが出来たなら、どんなに楽だったろう。そんなどうしようもない妄想を繰り返し返している内に、また一日が終わってゆく。

辺りを見回してみる。既に室内そとには他に誰も居ない。少女は一人、茜色の空間に佇んでいた。その時、下校を促すメロディが流れてきた。

さて、そろそろ帰ろう。腐れ切ったこの世界の中でも唯一、こんな自分に笑いかけてくれる『あのひと』が待つ場所へ。

見渡す景色のすべてを飲み込んでゆく紅い光をクリーム色の布で勢い良く斬り捨て、立ち上がる。

その瞬間。茨か何かが絡み付いてくるかのような、些細ながら鬱陶しい痛みを覚えた。

痛い。この痛みがいつまでも私を縛り付ける。

だけど、あのひとだけが認めてくれた、私という存在が確かに在ることを示す象徴でもある。

だから、この痛みを。私は守るよ。

ため息ひとつ溢し、少し乱れた椅子と机に手を付き立ち上がると、  
少女は覚束ない足取りで歩き出した。

## 10 孤独な兄妹

「宮廷警備隊の皆さんが駆け付けて下さったから良かったものを…。夕紀、お前は一体何をやっているんだ!!」

夢から現まへに戻かえってくる中で、まずは夕紀父の怒号が聞こえた。

「……。」

「おい、聞いているのかお前は!」

物言わず、いや言えずに黙っている夕紀を更に殴り付けるように、怒号が一際大きくなる。俺を心配してくれてのことだ、って…そりゃあ解とってはいるけどさ。

「……んな、怒…な…いでや…下…いよ夕…の…父さ…」

「… 暁!!」

「あ、傷口開きたくないなら起きちゃダメよ。」

穏やかな声が上がろうとした暁、暁に駆け寄ろうとした夕紀の双方を制する。

「まあ…とりあえず暁くんが助かって良かった。 けど…。」

安堵の笑みを浮かべようと表情を和らげた夕紀に、たしなめるような視線を流しつつ雷斗が呟く。

「… けど?」

「命は繋ぎ止められたけど、万全回復とまでは及ばなかった。ごめん…調薬師として未熟な僕達にはこれが限界なんだ。しばらくは妖魔討伐も黒翳に殴り込みに行くのも控えた方が良く。ていうか絶対禁止。」

いつもは伏し目がちな深いエメラルドグリーンが、他言を許さない揺るぎない一筋の光を呈している。



「そんな…。」

どうすれば良いんだよ、と言う嘆きは声にならず、窓から流れ込んでくる風に溶けて消えた。

「方法、無い訳じゃ…無いんだよ。」

「えっ！？教えるっ今すぐ！！」

「グエ…っ」

蛙が潰れたみたいなきき声を漏らし、勢いに押されて数歩下がる雷斗。ついでに言うなら首が締まっている。

「とりあえず、雷斗の首を絞めてるその手をお離しなさいな夕紀ちゃん。教えて貰う前に雷斗が死んじゃうよ。」

「あ、ごめん…。」

夕紀が手を離すと同時に、雷斗は気が抜けたらしくその場にへたり込む。が、すぐに数回深呼吸して気を落ち着け、「僕達の集落と、東の方にある橋で繋がってる集落があるじゃん？呪術師と龍使いの人の村。そこには、僕達の集落に生えてるのより格段に効き目の良い草花があるって。それで作った薬は、本当に良いらしいよでも、」

「今すぐ行つて貰ってくる！！」

「あ、ちよ夕紀、待てっ」

雷斗と暁の言葉を最後まで待たずして駆け出してゆく夕紀。茫然と見送る子供達の後ろで、怒りを通り越して呆れたというように夕紀父が頭を押さえ溜め息をついた。

「あ、あれ、あの欠陥人<sup>ロボット</sup>じゃね〜？」

数メートル後ろから、耳障りな幾つかの笑い声が茜色の緩い坂道を転がってきた。下校時間をずらしてやったつもりだったけど、どうやら待ち伏せしてやがったらしい。こうなると、ヒジヨーに面倒く

さいことになる。

「あ、本当だ〜。」

「てか、ロボットていうかゴリラっぽくね〜？」

一拍置いた後、鼓膜を軋ませるような大爆笑。嗚呼、本当に面倒くさい…。そして、「ねえ〜これから研究所にでも帰ってメンテナンスでもするの？それとも森？」

目の前に来たかと思ったら、そんな虚言を吐き散らす。もはや日課になりつつある事だ。なんていうか、まあ、この馬鹿達じとって暇なんだな。

少女は、ただ静かにため息を吐く。その顔に怒りの炎や涙の雨などといった、表情らしい表情は無い。少しの間の後、少女はまた前を向き、おもむろに歩き始めた。まるで、背後で催されている雑音の多重奏など、取るに足らないとも言つように。

「…は？何、ため息なんか吐いちゃってんの？」「マジうぜえし。」

少女が無反応だったことが気に入らなかつたらしい、二人の男子バカがビー玉ほどの大きさの小石を蹴った。それは寸分たが違わず少女の両足に衝突する。「…………つ。」  
さすがに堪らず、少女の体は前のめりになった。が、少女は頭から転倒しそうになるのを寸でのところで持ちこたえ、僅かに眉根を潜めながら白と水色の縞模様の長い靴下を下げる。

刹那、後方から再び嘲笑交じりの歓声が上がった。

「お〜来たあツ。損傷部分の修復ですかあ〜？」

「道のド真ん中だけど大丈夫う〜？」

そんな雑音を一切無視し、同時に感情の機能を停止する。傷付いたり泣いたりなんかしない。絶対に。

そう自分に言い聞かせると傍のコンクリート塀に寄り掛かり、スカートの裾を軽く持ち上げて足首を見る。

まるで大海の波を模した様な、青っぽい曲線まげが少女の膝下から足首まで生じていた。

「うっわ、ヤッバ〜」

「ちょーキモっ」

視界の端で何か言ってる馬鹿共を無視し、淡々と負傷の具合を確認することのみに集中する。この痣は生来のものだ。誰にどう嘲笑わらいわれようが、どうしようもない。どうでもいい。

かつて、本来なら自分を慈しみ、守ってくれる筈はずの家庭かみから見放されたと知った時、私は全てを諦めた。涙も、怒りも、苦しみも、笑顔でさえも。何処どこかへ置いてきてしまった。

それらを取り戻せるのは、「あのひと」の傍だけ。私と同じ、冷たい闇を抱えたあのひとだけ。

毎日のように吹き荒すぶ侮蔑むべつの中で、「あのひと」が向けてくれる柔らかない笑顔や呼ぶ声だけが、ずっと私の道標ひかりだった。それは今も変わらない。

「……………」

端から見れば禍々しい以外の何物でもないだろう紋様が刻み込まれた肌の診察を終え、少女は無表情のまま靴下を引き上げた。少しだけ赤みが残っていたが、この程度なら問題はない。前のめっていた

上体を起こす、ごく自然な仕草で膝に手を添える。　と、その箇所に半透明の薄く細い帯のようなものが巻き付いた。かと思つた刹那には溶けるように掻き消えてしまった。少女の肌に残された赤みも、同様に。

「…君らの稚拙な攻撃なんて、全くもって問題ないから。」  
少女は努めて無感情な言葉を静かに紡ぐと踵を返し、空を焼く炎とそれをも飲み込まんとする青暗いの闇とが迫る坂道を掛け降りていった。

「…ただいま」  
家に着いた少女の目に真つ先に飛び込んできたのは、居間のソファ―に寝転がりつつ何やら学業用魔導書、平たく言えば学校の実技系魔法の教科書を眺めている人物だった。

「…ただいま、蒼牙。」  
「ん？あ、お帰り氷雨。」  
柔らかい、落ち着いた雰囲気の微笑が向く。それを見つめ返すだけで氷雨の口元も僅かに緩んだ。今の氷雨の表情を第三者が見たとしても、きつと我が目を疑ってしまうだろう。それくらい、普段の氷雨は笑っていない。唯一、彼　蒼牙の前だけだ。

「何、今度実技テストあるの？」  
「そうなんだよ。先生がやたらと実技好きでさあ…」眉根をひそませて愚痴る蒼牙に近付き、肩越しに教科書を覗き込む。『敵方の攻撃を水の被膜で防御する』というものだった。仮に敵襲を受けた場合、湖畔や清流、最悪の場合はそこら辺の水溜まりでも良い。とにかく水源さえあれば起動できる、極めて簡易な防御魔法だ。…思え

ばあの交流会の日以来、虹霓の至る学校ところで緊急時対応攻防魔法の訓練が徹底されるようになった気がする。

「蒼牙、起動失敗して一人だけ『また』居残り追試：なんてならなければ良いね？」

「…ナンノコトカナ？」

「あれ？今の『間』は何かなあ？ていうか蒼牙、龍との意志疎通は上手いのに呪術苦手なんだね」

「そういう氷雨も龍との意志疎通苦手じゃん。」

拗ねる蒼牙を見つめる氷雨の表情には、帰路の無感情な声音と瞳が嘘のように、紛れもない笑顔が浮かんでいた。緩く結んだ口元から、含み笑いに伴う吐息が微かに弾む。普通にどこにでも居る、その年頃の少女のように。蒼牙と居る時間ときは、その瞬間だけは。

こんな自分も『普通』に生きることを許されるような気がした。

それまでは。あまり、受け入れられない存在だった。どうやら周りにとって私は、出来れば自分達の目の届かない所に投げとおきたいだけと見ているとある意味で面白い存在だったらしい。それもそうか。滅多に居ないからね、生まれつき足にへんてこりんな紋様がある人なんて。更にその足には、まるで紋様に縛られているかのような軽度の機能不全。まあ日常生活では別に困らない程度だけど

忌みの念を抱かれるには充分すぎた。

親戚には「あの子が身内だなんて恥ずかしい」とか言われて。学校に行く年齢になれば当然、周りに見せ物みたいにされた。ふざけるな。私が何したっていうんだ。…なんて思っても、いつしか薄れていた。

感情を殺して自分を守る術を得たのは、その頃だ。そして、「本当」

の家族から捨てられたのも。

あの日。いつも通り学校が終わって、ごちゃごちゃうるさい奴らをいつも通り無感情にあしらって辿り着いた家には、…正確には家の跡地には、所々破れ、それを繕いもしていないままの衣服袋と、申し訳程度の金が置いてあるだけだった。噂によれば、ご丁寧ひとに自分が学校に行った隙に何処かに消えたらしい。今さら真実を知る術は無いけど。

その後はあまりよく覚えていないけど、…まあ孤児院にでも居たんだろう。暖をとることは出来たけど、数十の冷たい眼に晒されていた気がする。

そして紅葉が枯れ葉に変わり、枯れ葉が雪に埋もれて朽ち果て、その雪も柔らかい白い光で溶けていった頃　　今の家に引き取られた。漆黒の髪とこの村にある大きな湖と同じ色の瞳を持つ、三歳年上の男の子にも出会った。それが蒼牙だ。

間もなく、蒼牙も私と同じような境遇だと知った。その日から私達是一緒に生きてきた。…願うことは唯一つ。もう二度と、この『普通の』蒼牙かそくとの日常を失くすことの無いように　　…。

「…め、氷雨ッ」

肩に軽く食い込んだ爪の微かな痛みで、氷雨は我に返った。

「…蒼牙」

掠れた声でその名を呼ぶ。すぐに、ニコツと笑って髪を撫でてくれた。石鹸の香りが暖かい手と共に触れる。それだけで気分が和らいでゆく。

「大丈夫か？」

「あ…うん。ちよつと、思い出してただけ…。」

蒼牙の表情が一瞬、固まった。

「…大丈夫だよ、蒼牙っ。もう、どうでも良い事だから。」

取り繕って「アハハ」とか言いながら重い口角を引っ張り上げた、その時だ。

不意に眺めた窓の外に、野獣並みの全力疾走<sup>スピード</sup>で駆けてくる女の子と、その女の子を追い掛ける白い狼みたいな生物が見えた。

## 11 (前書き)

「満夜。出来たぞ。」

組んだ膝に置いてある古文書から視線を外して顔を上げると、其処そこに冬司が立っていた。

「出来たって、何が？」

満夜が問うと、冬司は『ガクツ』という擬態語を体現したようなジエスチャーを繰り返した。なんだか、よく訳が解らない。

「…ほら、前に『役立つもの作ってやる』つって、お前から虹霓の宝冠についてた宝石預かってたじゃん。アレ、出来たぞ。」

「……あ、ああ！あれか！本当に！！」

「…忘れてたのかよ。」  
「やれやれ…と肩をすくませ溜め息を吐く。満夜はその方を睨み付ける。」

「…はいはい悪かった失言だった。謝るから。…これ、渡しとくよ。」

「満夜は渡されたものを繋々（しげしげ）と見つめる。」

それは、手のひらサイズの鏡だった。しかし、不可解な点がひとつ。通常ものが映る筈の部分が例の黒い宝石で作られていて、とても本来の役目を果たせるとは思えない。

「え？何これ。なんでミラーが黒いの？映んないじゃない。」

私だってこれでも年頃の女の子なんだから、お洒落にはそれなりに興味あるんだよ？プレゼントしてくれるのは嬉しいけどもう少し考えてよ。……というような心情が、満夜の表情からは容易に見てと



れた。

「えっと…これは化粧する時とかに使っくんじゃなくて。鏡〓化粧道具の一つ、って観念は一回、頭ん中から除外して。」

「え？」

一体、冬司<sup>かれ</sup>は何を言っているのか。本気で訳が解らない。

「これはな、人の心の闇を映し出す特別な鏡なんだ」「…へえ」「そんでもって」

冬司は足元に置いていた、鳥獣飼育に使われるようなケージを持ち上げて見せた。数匹の鼬がゲージの中で蠢いていた。煌々と燃えているかのような紅い瞳が、ジツと満夜を捕らえる。

冬司はその中の小柄な一匹を掌で包むようにして抱き寄せ、

「満夜、鏡を仰向けでそのテーブルに置いて。」

満夜が言われた通りにすると冬司は鏡の上に鼬を置いた。すると、鼬はまるで餌を貪るように鏡をペロペロ舐め始めた。

「可愛い…。でも、そこには餌なんか無いよ？」

鼬の頭を撫でつつ、満夜は鏡を見つめる。そして、その瞬間息を呑んだ。

「どうだ満夜。驚いた？」

冬司が得意気に笑む。満夜は相変わらず瞳を大きく見開いて固まっている。

闇を映しているだけだった筈の鏡に、線の細い長い黒髪の少女夕紀が映っていた。

「この子は、虹霓の…。」

そう呟きながら鏡に降れると、黒髪の結構カツコイイ少年、何故か瞳がエメラルドグリーンの少年、赤茶色の髪をツインテールにしている美少女…などと次々に映っていった。

「そこに映るのは虹霓の中でも特に心に暗いものを持っている人。…そして、虹霓の宝冠の宝石に秘められた各々のチカラの『器』となる、言わば『選ばれた』人だ。…黒翳の再建を目指すにあたって、俺達の駒にも脅威にもなるかも知れないな。あと、鼬こいつらは鏡に映る人の心に巢食う『暗いもの』を食うのが好きなんだ。下手な飼育をするより格段に強くなるしな。…黒翳の再建も、鼬こいつらがどう成長するかも、全ては満夜おまえが鏡それをどう使うか…、だ。」

鼬をゲージに戻し、冬司の靴音が廊下の闇に溶けてゆく。鼬達はキイキイと鳴きながらそれを見送る。

満夜はというと、微動だにせず、食い入るように鏡を見つめている。

その顔には笑みが浮かんでいた。

窓の外の一人と一匹の顔をもっとよく見ようと目を凝らした時、不意に、誰かに名前を呼ばれた気がした。

訝しげな表情で氷雨は外に出た。金木犀の香りを含んだ風が、頬を撫でて通りすぎてゆく。

誰も居ない。おかしいな、何か、誰かに呼ばれたような気がしたのに……。首を傾げながら辺りを見回し、耳を澄ませる。だが、清流が流れゆく水音、木の葉が擦れ合いざわめく声が小さく聞こえるのみだ。

溜め息をつき、再び家の中に入ろうとした、瞬間。「あなた、氷雨ちゃんだよな?」

「……?」

声の方に視線を投じる。艶やかな黒髪ショートカット、赤に近い濃いピンク色の瞳の少女がこちらを見ていた。知らない子だった。氷雨は無意識に足の向きを換え、極力見られないようにする。そして、努めて平静を装いながら

「あなた、誰?」

「満夜。…安心して。私は氷雨ちゃんの味方だよ。」  
そう言って微笑む満夜。「いや、見ず知らずの人に『味方だよ』とか言われても簡単には信じられないし。」

………という言っわけにもいかず、氷雨は曖昧に頷く。

「ねえ」

声のトーンが微妙に変わった。氷雨は僅かに眉を潜める。

「…何か？」

心根では僅かな抵抗を抱きつつ、ゆっくりと満夜に向き直った、

「ねえママあゝ。何であのお姉ちゃんの足、あんなへんてこりんなの〜？」

「しっ、やめなさい…！聞こえちゃうじゃない。」

…どうやら通りすがりの親子連れらしい。氷雨がちらりと見やると、母親はまるで異形の者を見たかのような顔をして形だけの会釈をし、子供に「良いからこっちにいらっしやい」とかお決まりの台詞を吐いて足早に去っていった。

…良いよ、別に。どうでも。

遠ざかる大小の背中を漠然と眺めながら、溜め息が零れる。

「…ああいうのってさ、むかつくよねえ…。」

「…え」

振り向くと満夜が腰に手を当て、頬を膨らませている。

「だって、なんで外見でしか人を判断出来ないんだ、ってマジ苛つくもん。」

「…別に良いですよ。もう慣れた。第一、満夜さんには関係ないことでしょう。」

「良くないよ…！友達を悪く言われてるのに見逃せる訳ない。」  
そう言うのと満夜は氷雨に抱き付いた。そして事態を飲み込めず固まる氷雨の耳に唇を寄せ、

「例え皆とちよつと違う所があるとしても、だからって私は氷雨ちゃんを周りから馬鹿にされて良いとは思わない。…思い出して？  
今までの日々を。足に痣があるからって謂れのない差別受けて、家

族に見捨てられて。心の均衡を保つために感情を殺したりして耐えて。」

氷雨は頭を押さえた。

『お前は我が家の恥さらしだ』 『お兄ちゃんが学校でいじめられるのは皆、あんたが悪いのよ』 『ねえ、なんで足にこんな模様があるの？ヘンなの〜ッ』 『お前って足が変だし表情変わんないしロボットみてえ』 『いや、ゴリラみたいの間違いだった。なんでゴリラがここに居んの？森に帰れよ。あはは！！』

「うるさい！！」

ありつたけの声で叫んだ。刹那、急に脱力感が大きな波となつて覆い被さつてきた。次の瞬間には不可視の手で前後に強く揺さぶられたような衝撃。

氷雨はフツと意識を失った。

コントロールが出来なくなった体が前傾してゆく。

「氷雨っ」

腕を引つ張られ、氷雨の体は今度は後ろに傾く。そして、しっかりと抱き止められた。蒼牙だった。氷雨の甲高い叫びを聞いて飛び出してきたのだろう。

「氷雨っ、大丈夫……」

言いかけた言葉を飲み込み、髪を透いて小さい体を包み込む。

氷雨の頬には一筋の涙が伝っていた。

「思った通り。氷雨ってかなり精神弱いんだね…。」  
黒い龍の背に寝転びながら、満夜は移ろう雲の流れを見つめる。脇に置いた例の鏡の上には鼬が二匹、鏡を舐めている。  
「可愛い君達を育てるには打ってつけ。ねえ？」  
頭を撫でてやると鼬は気持ち良さそうに瞳を細め、キィ、と鳴いた。

「…でも氷雨だけじゃ足りないよね…闇は深いけど、なんせ不倶の上ちひに小柄な女だし。次は、もっとお腹が満たされる相手にしないとね。どうせなら男が良いかな」  
『そうだ』、と返事をするかのように鳴く二匹を膝に乗せ、眼下を見下ろす。

「…ん？」  
調薬師の村と魔術師・龍使いの村境で、何やら門番と揉めてる少女が見えた。彼女の足元には白っぽい犬が付き従い、呆れたように尻尾で頭を押さえている。

背中まで伸びた長い黒髪。見覚えがあった。

「ちょっとゴメンね」  
鏡に乗ろうとしていた鼬を退かし、鏡を目の前に持ってくる。鼬が不満げに鳴く。

「すぐ返すよ。悪いけど一瞬、貸してね。」  
優しく諭すと鼬は渋々といった感じで頷く仕草をし、暇潰しに仲間

と遊び始めた。

「うん、良い子だ。」

そう言いながら鏡を、現在進行形で門番と揉めてる少女に向ける。すると、すぐに真つ黒い平面に少女の顔が映し出された。そうだ。数時間前に冬司に鏡を貰った時に映った、あの子だ。そつと鏡に触れると、氷雨の時同様、胸部に黒い穴が出現。しかも氷雨のものよりも、更に穴が大きかった。

「…男でなくても、充分かも。」

にやり、と瞳を歪ませる。

「…あれっ？」

更に不思議な事が起こっていた。鏡に映る少女の隣にもうひとり、黒髪はかなり格好良い少年が映っていたのだ。しかも二人の胸部の穴が一本に繋がっており、トンネルのようになってる。

「…二人の共通の闇ということか…。興味深いねえ」

楽しげに弾んでいるようで、どこか冷え冷えとした咳きは黒い龍の咆哮に掻き消された。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7591x/>

---

とある王国に巡る運命(もの)

2011年12月11日17時49分発行